

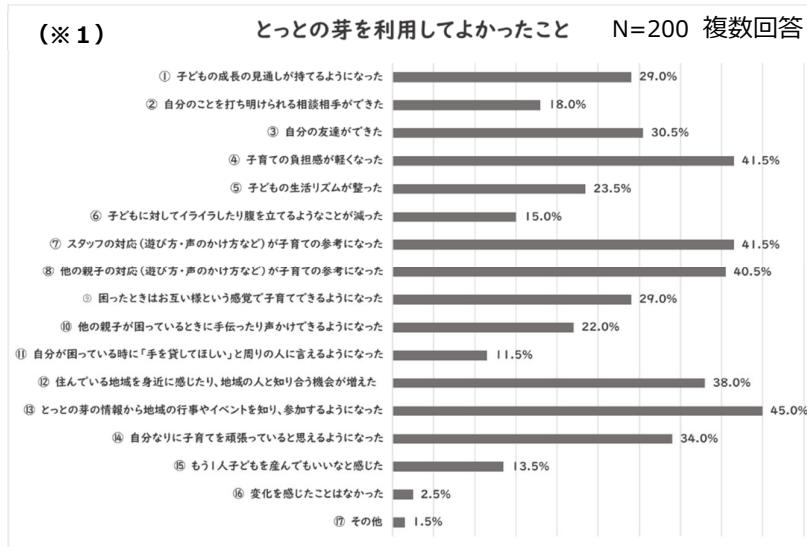
## 1 親子の居場所事業

目指す拠点の姿	(参考)3期目振り返りの課題	自己評価(A~D)	
		法人	区
①利用者を温かく迎え入れる雰囲気のある場になっている。	・区と共に協議を重ね開始した「土曜両親教室」は、拠点で参加できる組数に限界があるため拠点以外の会場(地域ケアプラザ等)での開催や、平日版の開催等、開催回数を増やしより多くの参加を目指す。	A	A
②多様な世代、性別等の養育者と子どもが訪れる場になっている。	・子どもの育ちに心配のある養育者が増えており、ひろばの表示やおもちゃ等、子どもたちが過ごしやすい環境を区や専門家の意見を取り入れながら作っていきたい。	A	A
③養育者と子どものニーズ把握の場になっている。	・現在の養育者の姿から、保育園探しに忙しく仲間づくりをする時間がない利用者やコミュニケーションが苦手な利用者等多くみられ、養育者の姿が変化してきている。短期間のひろば利用で仲間づくりや少し先を見通した育児を経験できるような利用者との関わりに努めたい。	B	B
④親(養育者)自身が親として育ち、また子どもが育つ場となっている。	・拠点に来るのが難しい遠方の方に向けて、地域で出張ひろばを展開したい。	A	A

### 評価の理由(法人)

(主なデータ)

令和6年度 とっとの芽利用者アンケートより 回答者数: 200名



のべ利用者数(子どもの人数)			
	R4年度	R5年度	R6年度
0歳児	8,493	8,424	7,780
1歳児	7,969	8,321	6,685
2歳児	2,924	3,810	4,336
3歳児	1,498	1,676	1,831
4歳児	670	788	762
5歳児	253	447	342
6歳児	101	139	133

R6年度 交流を目的とした事業 実施回数と参加組数	東戸塚		サテライト	
	回数	組数	回数	組数
計測の日・おたんじょう会	12	74	12	87
赤ちゃんタイム	34	563	14	305
★赤ちゃんとあそぼ(オンライン)			2	7
★よよちはいはい			3	79
ふたごみつごタイム			10	56
★はじめととっ			6	20
お パパのおしゃべりタイム	11	53		
し ★パパうるるむの日			7	33
や ふたごみつごの子育て	2	3		
ベ ★リトルベビー	1	2	3	12
リ 幼稚園パパママあつまれ	1	12		
タ ちよきっとママ	3	14	2	6
イ ★ダウン症児を育てる親のおしゃべり会	4	14		
ム ★シングルさんのおしゃべりサロン	4	8	2	3

★印は過去5年間で始まった事業

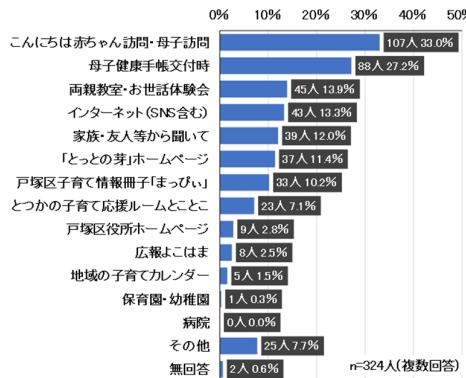
R6年度 妊娠期の家族向けの事業 実施回数と参加組数	東戸塚		サテライト	
	回数	参加組数	回数	参加組数
お世話体験会	8	90	11	69
平日のお世話体験会	6	31	5	17
地域版お世話体験会	2	13	2	5
多胎版お世話体験会			1	3
産前産後カフェ	6	15		
パパの沐浴体験	4	5		

R6年度 学びを目的とした事業 実施回数と参加組数	東戸塚		サテライト	
	回数	組数	回数	組数
管理栄養士	11	65		
★理学療法士	3	26		
★歯科衛生士	7	37		
★園長先生			2	7
助産師	18	70		
教育者向け講座				
ウナシード子育て隊 (イヤイヤ期・トイレトレーニング ・手作りおもちゃと遊び・子どもの食事)	4	73		
★子育て啓発事業(防災・子育て)	3	79	2	25
ハッピー☆ママ	24	173	25	155
防災訓練	2	29	10	131

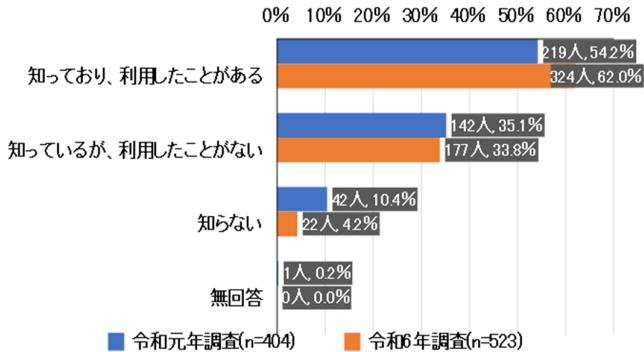
★印は過去5年間で始まった事業

## 令和6年度 戸塚区地域子育て支援拠点「とっとの芽」に関するアンケートより

### 【とっとの芽をどこで知りましたか?】 (※2)



### 【とっとの芽を知っていますか? (前回比較)】 (※3)



### 【出張ひろばについて】 (※4)

「知っており、利用したことがある」と回答した方の割合

区内平均 2.1%、秋葉町 37.5%、小雀町 14.3%

#### 1 妊娠期から様々な親子が交流する場

- ・コロナ渦の収束に伴い利用者同士が対面で交流できる機会が持てるようになった。興味・関心のあるテーマで集まりたいとの当事者の声から、低体重出生児、ひとり親、父親、ダウン症児、発達が気になる子を育てる親の会などのおしゃべりタイムを継続的に開催している。参加者同士が情報交換を行う中で、共感や気づきを得られ交流が生まれるよう、働きかけを行っている。
- ・普段から、月齢や、関心事・悩みなどが共通する利用者同士をつなげ、交流を促したことで、「子どもの成長の見通しが持てた」や「子育ての参考になった」などのアンケート結果につながった。(※1)
- ・サポーター(注1)や学生がひろばに入り、子どもと遊び見守ってくれることで、養育者同士の話す時間が持てた。わらべ歌や、草花の色水遊びなど、様々な経験を提供してくれたことで親子の遊びの幅が広がり、世代を超えて温かい交流が生まれている。
- ・妊娠期プログラムのお世話体験会(注2)では、早期から拠点や様々な支援を知ることができて安心だという声が聞かれている。また産後早い時期から安心して参加できる赤ちゃんタイム(注3)やハッピーママ(注4)を実施することで、妊娠期からの居場所の提供ができている。
- ・お世話体験会など妊娠期からの利用者から産後も利用につながる方は一部である。引き続き、拠点に来ていない層へのアプローチの仕方を考えていく。

注1)サポーター:とっとの芽に登録しているボランティアの名称

注2)お世話体験会:沐浴・妊婦体験と先輩パパママとの交流ができるプログラム

注3)赤ちゃんタイム:妊娠期からハイハイ前までの月齢向けのひろば

注4)ハッピーママ:生後1~4か月の子育てはじめての親向けの4回連続プログラム。親子の愛着形成や生活時間、困りごとなどを仲間同士で共有し話し合いながら子育ての力を身に着けていく

#### 2 拠点から離れた地域へのアウトリーチと働きかけ

- ・出張ひろば(あきば de とと・こすずめ de とと)や地域版お世話体験会、地域版ハッピーママ、とつか公園あそび隊(注5)は、拠点から遠いエリアで場を設定した。地域の協力を得ながら展開したことで、出張ひろばでの周知が徐々に行き届き、利用・参加者も増加してきている。遊び場の選択肢の一つとなり、地域に出るきっかけづくりにもつながった。

- ・出張ひろばやとつか公園あそび隊を土曜日に開催することで、幼稚園や保育園に通っている親子が訪れた。引き続き、拠点に来ない親子の利用が増えるよう(新規含む)、開催日や場所や訪れやすさを検討し、地域での居場所となることを目指す。

注5)とつか公園あそび隊:地域支援者の協力を得ながら、地域ごとに開催している外遊び企画。

### 3 親育ち、子育ちを意識したひろばづくり

- ・どの年齢、発達段階でも参加できるプログラムや工作コーナーなどの遊びを工夫した所、他の親子が、異年齢の子どもの遊び方や親の関わりをまね、学ぶ良い機会になった。
- ・庭のあるサテライトでは、主に3～5歳児が野菜の収穫を体験し、葉の形や色など野菜について知り学ぶ機会となっている。またサポーターの協力もあり、多世代交流が生まれている。
- ・コロナ禍が明けてランチタイムを再開し、他の子どもたちの食べる様子を養育者が見て学ぶ機会を提供できた。食事内容がレトルト食品から手作りのものへと変化する家庭もあり、親子にとって学びの機会となっている。
- ・ひろばでは、異年齢の子どもたちが交わることを大切にし、砂場や遊びの中で自然な関わりが生まれるよう工夫した。また、親同士が学び合えるような声かけや関わりを意識的に行った。「子どもの興味や関心に気づくきっかけとなった」「先の見通しが持てた」などの声が聞かれている。
- ・自然災害による有事の災害に備えて防災ワークショップを行ったことで、地域の防災活動や避難時のシミュレーションなど親自身の意識づけにつながった。また小児救急講座は消防署の協力を得て毎年開催し、日常の生活の中で起きたトラブルについて学び、AEDの使い方を実際に体験することで事故防止の意識が高まった。利用者の興味も関心も高く参加人数も多い。引き続き継続して開催を検討する。
- ・近隣保育園と連携し、子育て講座を年4回実施した。ひろばの相談で関心事が高いもの(トイレトレーニング、イヤイヤ期の理解と対応、遊び、食事)や、支援者が大切と思うことをテーマとして取り上げた。
- ・「子どもとの関わり方が分からない」「子どもとの過ごし方が分からない」という養育者の声から、赤ちゃんタイムやおたのしみタイム、ハッピーママなどで、ふれあい遊びや、声のかけ方、お互いの家での過ごし方などを参加者同士で共有する時間を取り入れた。親子の間に安心感が生まれ、より良い愛着関係の形成につながるように、今後も続けていきたい。
- ・お世話体験会に参加した夫婦やハッピーママ参加者が、その後は先輩として経験を伝える立場にまわるという良い循環が、さまざまな場面で見られるようになった。

### 評価の理由(区)

①

- ・拠点定例会やスタッフミーティングに出席する中で、実施後の振り返りや次につながる対応の工夫について共有・検討がされていることを確認し、必要時に相談時の対応や関わり方の助言や研修を行った。
- ・アンケートではとつとの芽を知るきっかけとして、こんにちは赤ちゃん訪問・母子訪問、母子健康手帳交付時が上位を占めている(※2)。また、令和元年度に比べ、拠点認知度と利用経験割合が上昇し、区民にとってより身近な場所となっている。(※3)

②

- ・年2回、妊娠期支援事業の打合せを行い、区、拠点で実施している事業の目的や対象、内容について共有している。土曜開催や出張開催などの工夫を確認し、周知に協力することで、妊娠期からの拠点利用につなげている。(お世話体験会、新米パパ教室、両親教室、母子健康手帳交付時や母子保健コーディネーターとの連携)
- ・低出生体重児、障がい児、多胎児、ひとり親など多様な親子向けの企画については、母子保健の支援と連動させながら周知に協力している。
- ・アウトリーチを検討する中で、出張ひろばやお世話体験会が開催され、拠点から離れたエリアの利用者が拠点利用につながっていることを確認している。(※4)アンケートから確認された拠点利用につながりにくい地域へのアプローチは、今後検討していく。

③

・区と拠点で把握している親子のニーズを共有しあい、事業運営に反映している。(父親支援、アタッチメントにつながる親子の関わり)

・拠点と共に把握した親子の現状やニーズについて、親と子とつどいの広場(以下、つどいの広場とする)連絡会やこにちは赤ちゃん訪問員定例会などを通して関係機関と共有し、妊娠期からの支援や早期から地域に親子をつなげる取組につなげている。

④

・拠点との定例会で、理学療法士による相談や常設の工作コーナーの設置など、子どもの育ちの視点でプログラムや環境面の工夫ができていることを確認している。ハッピーママ、子育て講演会など、養育者が子どもの健全な育ちに必要なことを学び、養育者同士で相談、情報交換し合う企画について方向性の確認や検討をしている。

### 拠点事業としての成果と課題

(成果)

- ・多様なニーズに対応したプログラムを実施し、共通点を持つ親同士が交流でき、不安軽減や成長の見通しにつながった。
- ・拠点から遠い地域へのアプローチの検討や、地域との連携により、出張ひろばが開催できた。拠点から遠い地域の親子が地域とつながるきっかけを作れた。
- ・親子の育ちの視点で、就園後の児も利用できるような、工作コーナーの設置や野菜の収穫体験の場を設けた。
- ・ハッピーママ、子育て講演会など、養育者が子どもの健全な育ちのために必要なことを学び、養育者同士で話し合う企画を実施した。

(課題)

- ・養育者の多様な価値観へ対応や、養育者同士の交流を求める層に対してのアプローチ方法の検討を行う。
- ・保育園や幼稚園に入ったあとも、地域とつながる大切さを確認していく。また拠点に戻ってきて良いというメッセージは伝え続けていく。
- ・子どもの育ちにとって必要な視点を念頭に置いた上で、養育者のニーズとデマンドを整理し、居場所の事業展開に活かす。

### 振り返りの視点

ア いつでも気軽に訪れることができ、安心して過ごせるような配慮、工夫をしているか。

イ 居場所を訪れる様々な利用者(養育者、子ども、ボランティア等)の間に、交流が生まれるように工夫しているか。

ウ 多様な養育者と子どもを受け入れる配慮や工夫をしているか。

エ 養育者と子どものニーズを把握するための工夫をしているか。

オ 把握されたニーズを区関係機関と共有し、ニーズに応じて必要な支援や新たな事業、事業の見直しにつなげているか。

カ 子どもの年齢・月齢に応じた遊びの環境が整備されているか。

キ 子ども同士の関わりが尊重され、子どもが健やかに育つために必要なことに養育者が気付き、学ぶ機会を提供する場となっているか。

ク 養育者同士が相談、情報交換し、課題解決し合う仕組みや仕掛けがあるか。

## 2 子育て相談事業

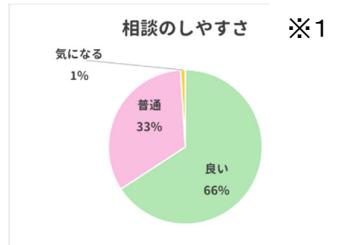
目指す拠点の姿	(参考)3期目振り返りの課題	自己評価(A~D)	
		法人	区
①養育者とスタッフとの間に安心して相談できる信頼関係ができ、気軽に相談ができる場となっている。	・相談内容の傾向について把握、分析し、養育者のニーズをひろば運営につなげていくことが必要。 ・サテライト開所や世代交代により新人スタッフが増えたので、引き続き傾聴等テーマとした相談スキル取得の研修を企画、実施し、ひろばスタッフ全体の相談対応におけるスキルアップへ取り組む。	A	B
②相談を受け止め、内容に応じて、養育者を関係機関につなげている。また、必要に応じて継続したフォローができている。	・区と拠点、お互い顔の見える関係性を構築できるような連携を継続。必要時、相談事業で双方が連携し、養育者のニーズに応じ、タイムリーな相談対応を目指す。	A	B

### 評価の理由(法人)

(主なデータ)

令和6年度 とっとの芽利用者アンケートより 回答者数: 200名

「子育ての負担感が軽くなった」 回答数 83人 41%  
 「自分なりに子育てを頑張っていると思えるようになった」 回答数 68人 34%



専門相談:栄養相談(管理栄養士)・子育て相談(助産師・臨床心理士)

R6年度 聞いちゃおう実施テーマ	
管理栄養士	・はじめての離乳食 (6回) ・中期の離乳食 (6回)
歯科衛生士	・虫歯と歯みがき ・子どもの歯並び
作業療法士	・むきぐせ予防になるふれあいあそび ・ずりばいはいはいを促す講座
保育・教育コンシェルジュ	・保活はじめのいっぽ

※2

ひろば相談		
	R4	R5
東戸塚	2,760件 2,240人	2,536件 2,212人
サテライト	2,781件 1,968人	1,991件 1,589人
	R6	2,335件 2,300人
		1,745件 1,650人

### 1 対人援助のスキルアップや共有の工夫、話しやすい雰囲気づくり

- ・傾聴やロールプレイで利用者の立場に立った実践練習をスタッフ間で定期的に行い、個々のスキルの向上に努めた。利用者アンケートの「相談しやすさ」(※1)の結果にも表れ、利用者にとっても話しやすいひろばを運営することができた。
- ・日々の振り返りの時間に、その日のひろばでの親子(雑談の内容や表情、子どもの様子)について共有し、よりよい対応に向けての意見交換を行っている。またカンファレンスでは、対応について振り返り、臨床心理士からの助言も取り入れ、スタッフ間で対応を統一している。
- ・助産師の相談日は予約制をなくしたことで、ひろばで子どもをあそばせながら気軽に相談する方が増えた。
- ・過去の来館時のエピソードに関連する声掛けから信頼関係が生まれ、相談につながっている。
- ・出張ひろばや地域開催プログラムなどに、スタッフや横浜子育てパートナーが出向くことで、拠点に来館できない方にも相談する場の提供ができた。

### 2 多様な相談に対応できる仕組み作り

- ・専門家を交えた座談会では、相談内容からニーズを拾い、養育者の関心の高いテーマを取り上げた。  
(理学療法士:向き癖予防・はいはい、歯科衛生士:歯並び・歯みがき、助産師:きょうだい育児・卒乳断乳、管理栄養士:離乳食・幼児食など)
- ・相談内容の傾向を把握し、検討を重ね、養育者が同じ悩みを共有できる場を作った。自分以外の悩みを聞くことで、気づきや共感が得られ、養育者同士で情報交換、助言し合う姿が見受けられるようになった。(※2)

### 3 区や専門相談員・拠点機能との連携

- ・区との定例会で相談内容や親子の様子などの共有を行い、利用者への対応について話し合うことができた。
- ・専門相談員の座談会や個別相談の後の振り返りの内容を、日頃の相談対応に活かしている。
- ・ひろばでの会話で困りごとや悩みが聞かれた養育者を、横浜子育てパートナーや横浜子育てサポートシステムにつなげ、拠点内の役割分担や対応方法を検討している。区や専門相談員とも連携し、養育者の不安軽減となるよう、必要な情報提供や支援を行えた。
- ・専門相談を利用した方や、関係機関につながっている方も含め、拠点内で継続的な関わりをもっている。

### 評価の理由(区)

①

- ・拠点との定例会やカンファレンスに参加し、相談件数や相談内容の傾向、相談対応の確認を行っている。
- ・拠点スタッフのスキルアップやメンタルヘルスについての研修や助言などの対策が必要である。

②

- ・養育者への効果的な支援につながるよう、拠点の会議にて、区の事業体系図(事業の目的・関連性)の説明を行っている。
- ・支援が必要と思われる親子の拠点利用があったときには、区保健師へつなげてくれている。拠点からの連絡を受けて、区が訪問し、親子の状況把握をすることがある。
- ・各拠点のカンファレンスに参加し、ひろばなどでスタッフが受ける相談を確認し、対応を助言した。
- ・多様な背景をもつ利用者が増え、相談内容も多岐にわたるため、スタッフが相談内容を抱え込むことがないか、適宜確認が必要である。

### 拠点事業としての成果と課題

#### (成果)

- ・スタッフに相談しやすいよう、養育者への声かけの内容にも工夫をしている。
- ・個別の相談内容の傾向を集約し、養育者同士で共有できる場を設定している。
- ・養育者を横浜子育てパートナーや横浜子育てサポートシステムなどにつなげ、役割分担や支援の方法について、検討できている。

#### (課題)

- ・多様な価値観をもち、新しい育児スタイルを取り入れる養育者が増えている。情報の把握に努めつつ、安心安全で望ましい対応の検討や共有を行う。
- ・幅広い相談に対応できるよう、相手に合わせた相談対応スキルを学び続ける。
- ・支援が必要な親子が、適切な相談先につながれるように、区と拠点との顔の見える関係を継続していく。

### 振り返りの視点

ア 養育者が相談しやすい仕組みづくりや工夫をしているか。

イ どのような相談に対しても傾聴し、相手に寄り添う相談対応を行っているか。

ウ 相談内容の傾向を把握し、振り返りを行い、望ましい対応の検討や共有に努めているか。

エ 各種専門機関の役割を把握し、養育者への効果的な支援を行うための連携、連絡体制を作っているか。

オ 専門的対応が必要と考えられる相談について、適切に対応しているか。

カ 関係機関とつながった後にも、役割分担に応じて、継続的な関わりを持っているか。

### 3 情報収集・提供事業

目指す拠点の姿	(参考)3期目振り返りの課題	自己評価(A~D)	
		法人	区
①区内の子育てや子育て支援に関する情報が集約され、養育者や担い手に向けて提供されている。	・拠点を利用しにくい地域の親子への情報提供について、地域の施設や担い手の方からも拠点の情報機能が伝わるよう、地域とのつながりを大切にし、日々の情報交換や地区別連絡会などで発信していく。また、担い手と効果的な情報発信方法を一緒に考え協力していく。同様に拠点に地域情報を発信できる仕組み(アプリ、ホームページ、SNSなど)を引き続き整理し発信していく。	B	B
②子育てや子育て支援に関する情報の集約・提供の拠点であることが、区民に認知されている。	・情報過多により、どこに情報を取りに行けばいいかわからないという養育者の声がある。引き続き養育者のニーズ把握に努め、担い手からの生きた情報を含め情報内容を整理していく。	A	B
③拠点の情報収集、発信の仕組みに、養育者や担い手が積極的に関わっている。	・情報過多により、どこに情報を取りに行けばいいかわからないという養育者の声がある。引き続き養育者のニーズ把握に努め、担い手からの生きた情報を含め情報内容を整理していく。	A	B

#### 評価の理由(法人)

##### (主なデータ)

\*とっとの芽つうしん：毎月 1800 部発行 (125箇所発送) Instagram・ホームページでも掲載

\*主な媒体：【紙】つうしん、チラシ、まっぴい、広報とつか

【WEB・SNS】ホームページ、Instagram、とっとあぶり、拠点サイト

##### 令和6年度 とっとの芽利用者アンケートより 回答者数：200名

\*「子育ての情報を見る」

【拠点調査】回答者数：196人 回答数 87人 約 44%

【区調査】回答者数：324人 回答数 124人 約 38%

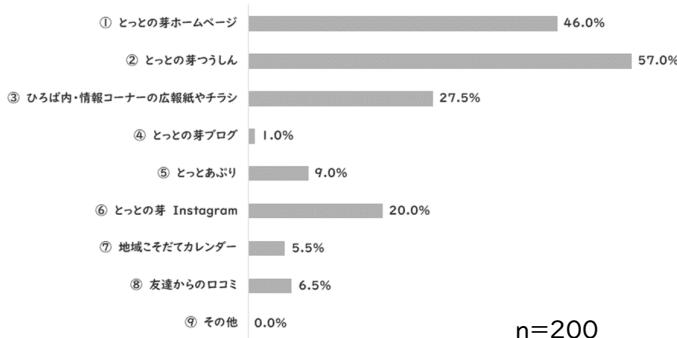
\*「とっとの芽の情報から地域の行事やイベントを知り、参加するようになったか」

回答者数 200人 約 45% (※1)

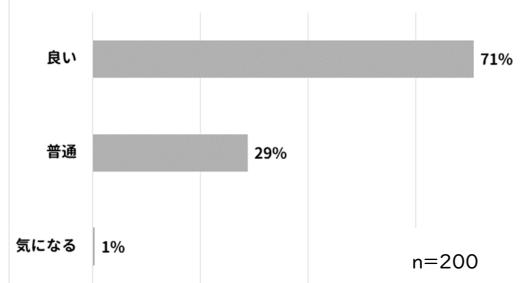
つうしんの主な配布先	
区役所	こども家庭支援課窓口・赤ちゃん教室・健診フロア・子育て応援ルーム等
公共施設	地区センター・地域ケアプラザ・図書館・コミュニティハウス等
子ども関係	親と子のつどいの広場・他区拠点・保育園・幼稚園
その他	地域のサロン・産科医療機関

SNS関連	(※3)
ホームページ	アクセス数 5,831件 (R6年度月平均)
Instagram	フォロワー数 2,202件 (R7年4月現在)
とっとあぶり	登録者数 3,162件 (R7年4月現在)

#### とっとの芽の情報ツールで役立っているもの



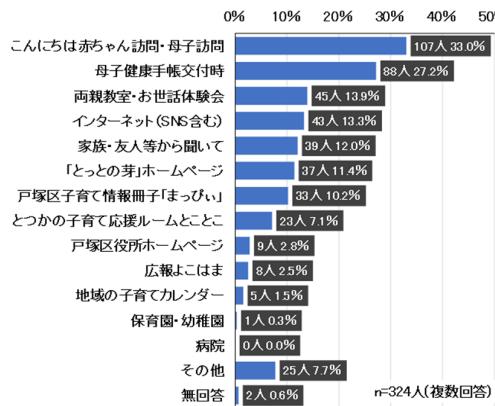
#### 情報の探しやすさ



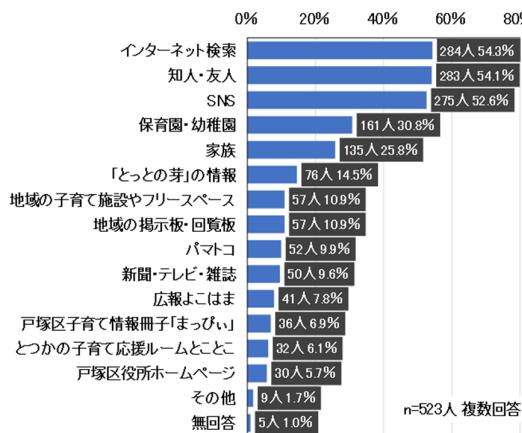
\*地域カレンダー・とっとアプリ情報入力データ数：587件・月平均49件 (令和6年度) (※2)

## 令和6年度戸塚区地域子育て支援拠点「とっとの芽」に関するアンケート

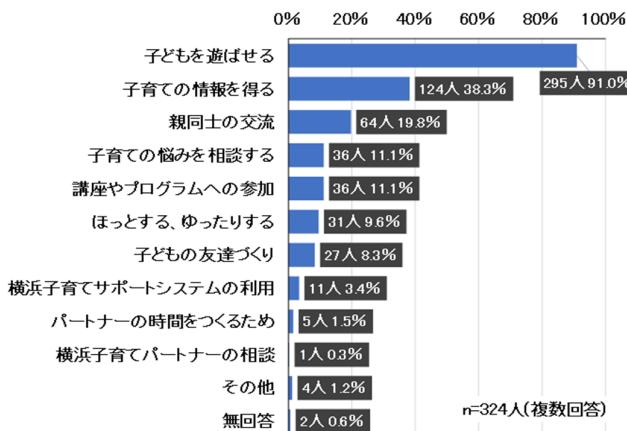
### 【とっとの芽をどこで知りましたか? (再掲)】(※4)



### 【子育てに関する情報をどのように収集していますか?】(※5)



### 【「とっとの芽」を利用する目的は何ですか?】



## 1 さまざまな媒体やネットワークを活用した情報収集と発信のしくみ

- ・情報を紙媒体や、SNSなどで発信することに加え、スタッフから言葉を添えることで、安心して事業や地域の子育て支援の場へつながる利用者が多かった。(※1)
- ・行政が発行しているマップや、地区別子育て連絡会(注1)の活動の中で作成された地域マップを集め拠点で配布したところ、親子だけではなく地域の子育て支援の担い手の方の来館にもつながった。
- ・はじめての拠点利用者には、居住地区の情報をまとめた地域情報セットやまっぴい(注2)を活用し、近隣情報を伝えている。また地域情報セットは、地区別子育て連絡会などを活用し、情報が入れ替わる年度替わりに内容の更新をしている。
- ・保育園・幼稚園口コミファイルを拠点に設置し、閲覧できることを広報区版で周知したところ、入園を考えている養育者が閲覧目的で来館するようになり、その後のひろば利用にもつながっている。また妊娠期からの利用にもつながっている。
- ・とっとあぷり(注3)は月に50件ほどのイベントを掲載している。(※2) 登録者も年々増加し、拠点から遠いエリアに住む親子にも情報を届けられている。さらに認知度を上げるために、引き続き周知していく必要がある。
- ・養育者への情報配信はできているが、担い手に向けた有益な研修や地域情報を配信する仕組み(アプリや定期配信ツール)が少ないため、検討が必要。

注1)地区別子育て連絡会:戸塚区内で子育て支援を行っている機関・個人のネットワーク。10地区それぞれで活動している。

注2)まっぴい:戸塚区内の子育てに関する様々な情報と地図をまとめた子育て情報誌。主にこんにちは赤ちゃん訪問で訪問員が配布している。

注3)とっとあぷり:戸塚区内の地域で開催している子育てイベントや講座を配信しているアプリ。毎週金曜日に配信している。

## 2 情報の集約・提供の拠点であることの周知活動

- ・拠点の情報収集・提供機能について、とっと芽つうしんや広報区版を活用し区内広域に周知した。
- ・地区別子育て連絡会や地域の会議、こんにちは赤ちゃん訪問員定例会、子育て支援者定例会で、情報収集・発信機能について紹介したこと、情報収集目的で来館する担い手も増えてきている。
- ・情報ラックを区民活動センター利用者や病院の来院者の目にも見えるところに設置したこと、拠点利用目的以外の方が情報を見て帰る姿も見られた。後日孫が生まれるからと情報を持ち帰る方もいる。

## 3 養育者・担い手の力で実現できた情報収集と発信のしくみ

- ・幼稚園・保育園座談会の参加者や口コミファイルを見て入園先を決めた養育者が、次の入園希望者に向けて自らが情報発信者となる循環ができている。
- ・地域の情報は、区内 10 エリアで開催している地区別子育て連絡会のネットワークを活かして集約されている。その情報を拠点の情報ラックへの配架や、毎週配信のとっとあぶりでタイムリーに配信し集客の協力をしている。(地域ケアプラザや主任児童委員など)
- ・SNS で地域情報を発信している担い手(利用者、地域ケアプラザ、NPO 法人、他区の拠点など)同士協力し、地域情報を相互に発信している。
- ・地域こそだてカレンダー(注4)・とっとあぶりの配信原稿入力を子育て当事者に依頼し、入力後の原稿チェックや配信画像の作成を拠点が担うなど、役割分担をしながら発信する仕組みができている。

(注4)地域子育てカレンダー:戸塚区内の地域で開催している子育てイベントや講座が検索できる WEB カレンダー

### 評価の理由(区)

①

- ・情報を届ける仕組みとして、拠点と共にまっぴいを作成し、毎年情報を更新している。区の事業(こんにちは赤ちゃん訪問、転入者面接、家庭訪問、乳幼児健診など)や、関係機関を通じて配布し、区ホームページにも掲載している。
- ・とっとの芽を知ったきっかけとして、こんにちは赤ちゃん訪問、母子健康手帳交付面接などの対面配布が上位を占めている(※4)。また、子育てに関する情報収集先は、ネット検索だけでなく、友人・知人、保育園・幼稚園との回答が多い(※5)。面接や訪問などの相談対応時、氾濫する情報に不安を感じている養育者を多く目にするため、実際に顔をみながら支援者から情報を届けることが必要である。
- ・地区別子育て連絡会では、様々なツールで地域情報を発信されていることを共有しつつ、対面での情報提供の意義も確認している。

②

- ・拠点が毎月発行している「とっとの芽つうしん」を母子保健事業(訪問、面接、乳幼児健診、両親教室、赤ちゃん教室)で配布し、拠点が情報の集約・提供の機能を有していることを周知している。また、各種連絡会(こんにちは赤ちゃん訪問員定例会、主任児童委員定例会、地区別子育て連絡会)を通じて関係機関にも周知している。広報区版のコラムや特集で、拠点事業を掲載し、周知した。

③

- ・定例会にて、養育者が情報発信に参画していることを確認している。
- ・地区別子育て連絡会で拠点の情報集約・提供の機能を周知している。地域の担い手から地域情報の発信の依頼があることを確認している。

## 拠点事業としての成果と課題

### (成果)

- ・情報を集約し様々なツールで発信することに加え、顔の見える関係で直接情報を届けることを大切にしている。
- ・養育者の関心の高い、保育園・幼稚園情報(口コミファイル)を設置し、周知することで、妊娠期からのひろば利用につながった。
- ・地域の会議や担い手の定例会などで、拠点が情報集約・提供していることを積極的に周知することで、その役割が認知されつつある。また、その発信に地域の方も参画する仕組みができている。

### (課題)

- ・情報過多によりどこに情報を取りに行けばいいかわからないという養育者の声がある。拠点の役割や情報発信機能について、子育て支援をしている担い手を通じて親子に届けていく。引き続き養育者のニーズ把握に努め、伝わる内容、届く仕組みを検討していく。
- ・『支援者向けメールマガジン』での配信がなくなり、地域の担い手に対する有益な研修情報を発信する機会が現状少ない為、仕組みの構築を検討していく必要がある。

## 振り返りの視点

ア 養育者や担い手が必要としている情報が何かをとらえ、区内の幅広い地域の子育てや子育て支援情報を収集・提供しているか。

イ 来所が困難な養育者や担い手も含め、情報を入手しやすいよう、さまざまな媒体や拠点以外の場を通して情報発信しているか。

ウ 利用者が情報を入手しやすく、自ら選べるひろば内の工夫をしているか。

エ ネットワークを活かして情報を収集し、を養育者や担い手に提供しているか。

オ 様々な子育て支援情報を拠点が集め、提供していることを広く区民に周知しているか。

カ 養育者や担い手から拠点に情報が届けられる仕組みや工夫があるか。

キ 情報収集・提供の企画に養育者や担い手が関わる仕組みや工夫があるか。

## 4 ネットワーク事業

目指す拠点の姿	(参考)3期目振り返りの課題	自己評価(A~D)	
		法人	区
①地域の子育て支援活動を活性化するためのネットワークを構築・推進している。	・地区別子育て連絡会の参加者について、保育園および幼稚園は現状では一部地区のみの参加となっているため、今後は地域全般での連携を探っていきたい。また、地区により活動状況に差があるため、子育て連絡会全体会として区域の課題を捉えつつ、地区ごとの活動にフィードバックできるよう、区や関係機関と共に認識をとりながら進めていく。	A	A
②ネットワークを活かして、拠点利用者を地域へつなげている。	・公園あそびは、イベント化、形骸化しないための方法の検討など、連絡会・地域との連携を深めながら取り組んでいく。	A	B
	・拠点内の地区担当スタッフ間および情報担当者との情報共有をこころがけ、地域の課題を吸い上げ解決の糸口を検討できるよう、拠点スタッフ全体の意識づけを促進していく。		

### 評価の理由(法人)

(主なデータ)

#### ネットワーク会議 参加人数 (延べ) ※ 1

地区名	R4	R5	R6
汲沢	29	52	54
名瀬	31	32	33
下倉田	12	13	14
上倉田	50	70	68
平戸	54	37	48
上矢部	45	50	46
舞岡・柏尾	51	39	43
南戸塚	31	35	37
大正	60	60	87
東戸塚	43	47	30
全体会	100	89	124
親と子のつどいの広場 ・拠点連絡会	25	11	16

#### 子育て連絡会全体会

テーマ	1回目		2回目
	R4	R5	
事務局版オンライン TRY & ERRORから学ぼう！～困りごとの解決策～	拡大版 ハイブリッド		・地区的取組発表（平戸・舞岡） ・講話「最近の子育て事情・親子を地域につなげる大切さ 棒田明子氏
事務局版 アンケート調査 ・初めて地域の支援会場に参加したきっかけ ・続けて参加している理由 ・参加することで子育てにどんな変化があったか	拡大版 ハイブリッド		・地区的取組発表（上倉田） ・講話アフターコロナ禍における0歳児の支援～1歳までに地域につなげる仕掛けづくり～ 棒田明子氏
拡大版 対面開催 ・1歳までに地域につながるしきけづくり ・子育て連絡会のあゆみ（20年） ・地区的取組発表（東戸塚） ・戸塚区の現状、アンケートの結果報告 ・グループワーク「地域とつながる」	事務局版 アンケート調査		・親親向け調査 ・初めて地域の支援会場に参加したきっかけ ・続けて参加している理由 ・参加することで子育てにどんな変化があったか

#### 【参加者の感想の分類】

「戸塚区の子育て支援の力強さを感じた」「ニーズを把握し、時代に合わせた情報発信をしていきたい」「個々の対象者に寄り添う支援が大切」「関係機関との連携の重要性がわかった」「地域に広げていきたい」など。

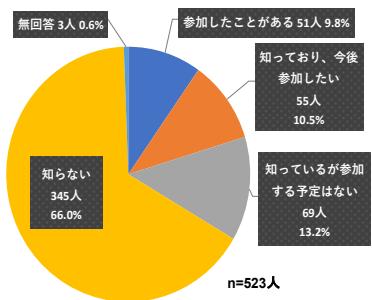
#### 令和6年度とつとの芽利用者アンケートより（再掲）（※ 2）

\*とつとの芽を利用してよかつたこと

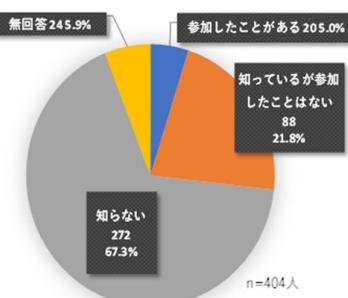
- 「住んでいる地域を感じたり地域の人と知り合うきっかけが増えた」【拠点調査】回答者数：200人 回答数 76人 38%
- 「とつとの芽の情報から地域の行事や事業を知り、参加するようになった」【拠点調査】回答者数：200人 回答数 90人 45%

## 令和6年度 戸塚区地域子育て支援拠点「とっとの芽」に関するアンケート (※3)

### 「公園あそび隊」の認知度、参加者率



### (参考)前回(令和元年度)調査結果(選択肢が異なる)



## 1 区内10地区の特性を活かした子育て支援ネットワークの構築

- ・地区別子育て連絡会で、保育園、幼稚園にも地域の子育て支援について知ってもらいたいという声があがり、呼びかけたところすべての地区で保育園、幼稚園の参加が実現した。地域関係者だけではない子どもを取り巻く多様な支援者同士で交流し、地域とつながる大事さについて意見交換ができるようになった。それにより幼稚園や保育園の園庭や施設を公園あそびの会場として利用するなど、地域の方と園との連携した取り組みにもつながった。また、高齢者施設が参加している地区や、駅近くで施設の参加が多い地区など、地区の特性によって参加機関も多岐にわたっている。
- ・地区別子育て連絡会で築いた関係性から、様々な助言や提案を受け、拠点から遠い地域(秋葉町・小雀町)での出張ひろば設置が実現した。

## 2. 戸塚区全体の子育てに関する課題などを相互に共有し、それぞれの地域で取り組む仕組みづくり

- ・毎年2回開催している子育て連絡会全体会(注1)は、コロナ禍でもオンラインを活用し継続して開催したことで、地域の子育て支援を推進することができた。
- ・令和6年度は子育て連絡会全体会(旧子育て応援隊)を発足して20年の節目でもあったことから、対面での開催を企画したところ115名の地域支援者が一同に参加した。他地区の参加者と「親子が地域につながるために、今後どんな場所を大事にしたいか」をテーマにグループワークを行い、戸塚区の親子の現状や活動の意義を共有することができた。
- ・アフターコロナを機に、0歳から地域につながるしきづくりをテーマに、地域の子育て支援の場に続けて参加している母親・父親向けにアンケート調査を行った。子育てにどんな変化があったかという問い合わせに対して、父親、母親共通の回答もあった一方、母親は「成長の個人差がわかり、育児の見通しが持て、安心できた。」父親は「子どもと出かけることが好きになった。」などの回答があった。子どもについても「人見知りをしなくなった」「生活リズムが整った」などの回答があった。その結果を各地区別子育て連絡会でフィードバックし、早期から地域につなぐことの大切さを確認した。
- ・つどいの広場連絡会を年2回開催し、その中で行ったワークで妊娠期から地域につながる大切な共通認識が生まれた。妊娠期から居場所を知つてもらうために各つどいの広場の紹介チラシを作成し、妊娠後期の手紙への同封や、区の両親教室で周知するなどの協力体制ができた。
- ・障がい者支援を行っている団体が主催するイベントや区社協主催の子ども支援ネットワークに参加することで新たな機関とのつながりが生まれ、地域の子育て支援について情報交換することができるようになった。

(注1)子育て連絡会全体会:区内10地区の子育て連絡会のメンバーが一同に集まり情報交換する会

### 3 地域ネットワークを活かした地域に利用者をつなげる取り組み（※2）

- ・区内全域で行っている公園あそびは、地区別子育て連絡会参加団体、機関に協力を得ながら実施している。0歳の参加も多く、早期から地域の支援者とつながる場となっている。主任児童委員主催のサロンや地域ケアプラザの自主事業、幼稚園、保育園と共に催すなど、公園あそびを形骸化させないよう工夫を凝らした。
- ・地区別子育て連絡会で築いた関係性を生かし、妊娠期から地域の居場所を知つてもらう取組として地域の支援者と共に開催場所を検討し、拠点から遠いエリアでもお世話体験会やハッピーママを開催することができた。
- ・とつとの芽つうしんで10エリアごとの地区別子育て連絡会の取り組みを特集記事で発信し、親子が地域のことを知るきっかけになった。利用者アンケートでは、とつとの芽の情報から地域の行事やイベントを知り、参加するようになった人が増えている。（※2）
- ・地区別子育て連絡会の参加団体同士で共催事業を企画したり、町ぐるみの事業を開催するなど、連携した取組が各地域で行われるようになった。参加者同士の日頃の活動や最近の親子の様子の共有をすることにつながった。また、コラボイベントのスタンプカードを拠点利用者に配布周知したこと、今まで行ったことない施設へ親子が足を運ぶきっかけになった。（上矢部地区：コラボイベント企画、大正地区：マップ作成、上倉田地区：スタンプラリー・キャンドルナイトなど）
- ・拠点から遠い地域にも拠点スタッフが出向き、地域の支援者が拠点を紹介することで、まだ利用したことのない親子の利用につながった。
- ・専門相談で来てもらっている助産師を地域の関係機関に紹介したり、拠点利用者が立ち上げた人形劇サークルを地域のイベントに派遣するなどの活動につなげた。

#### 評価の理由（区）

①

- ・地区別子育て連絡会では、参加者同士の顔の見える関係ができ、情報交換、話し合いができる段階になっている。さらに、お互いの役割や機能を生かした取り組みにつながっている。区は、連絡会の目的や必要性を共有し、全体の方向性を確認している。
- ・地区別子育て連絡会は、区・拠点・地域ケアプラザ（地域交流コーディネーター）が事務局となり、区内10か所で開催している。地域の関係者や関係機関との連携を強化し、地区の特性に合った取り組みを進めている。また、子育て連絡会全体会では、「親子を地域につなげる」をキーワードに、戸塚区の子育ての現状と各地区の特性や方向性を共有し、地区別子育て連絡会と連動させながら地域の支援の輪を充実させることができている。
- ・つどいの広場連絡会の企画協力をを行い、子育て家庭の現状や課題、各つどいの広場の取り組みを共有することができた。顔が見える関係づくりを構築する中で、親子を地域の別の居場所につなげることの工夫や、妊娠期からつどいの広場につながる重要性などを話し合うことで、区・拠点・広場が連携し、つどいの広場の機能の向上に取り組むことができた。
- ・外遊び事業は、「公園あそび隊」の認知度、参加した経験の割合ともに上昇（※3）している。地区別子育て連絡会と連動させ、地域の方や施設関係者にも協力を得ながら、地域に根差した活動を展開している。

②

- ・地区別子育て連絡会などのネットワークを活用し、親子を地域へつなげる支援について確認できた。
- ・ネットワークを活かして、拠点が親子を地域の居場所や資源につなげることができている。

#### 拠点事業としての成果と課題

（成果）

- ・地区別子育て連絡会の参加者同士が、情報交換し合える関係性は維持でき、参加関係機関も増えている。さらに、お互いの役割や機能を活かしながら、地域の特性に合った取り組みが各地域で行われている。
- ・地区別子育て連絡会で築いた関係性から、拠点から遠いエリアでもお世話体験会やハッピーママを開催でき、出張ひろばも設置できた。
- ・子育て連絡会全体会では、コロナ禍を経た親子の変化を共有し、早期から親子が地域につながることの大さを確認した。

(課題)

- ・子育て連絡会全体会を通して「子どもの育ちにとって大切なこと」をテーマに、地域で考えていくよう、親子のニーズや実情を把握し、関係機関と共通認識をとりながら支援の方向性を検討していく。
- ・子育て連絡会の参加者だけではなく、大学、市民団体、商業施設などとも情報交換をし、お互いの強みを活かした取り組みを行っていく。

**振り返りの視点**

- ア 地域の子育て支援関係者が、互いに知り合い、理解し、子育て家庭の状況及び子育て支援の情報や課題を共有するための場、機会をつくりだしているか。
- イ 地域の子育て支援関係者が協力し、支え合えるように、関係者同士をつないでいるか。
- ウ 子育て家庭や地域の子育て支援関係者のニーズを踏まえ、子育て支援分野に限らず、様々な社会資源と連携・協力した取組を実施しているか。
- エ 養育者や子育て支援活動に関心のある人を身近な地域の子育て支援の場や地域の活動につなげているか。

## 5 人材育成・活動支援事業

目指す拠点の姿	(参考)3期目振り返りの課題	自己評価(A~D)	
		法人	区
①地域の子育て支援活動を活性化するため、担い手を支えることができている。	・親子サークルに加入する親子も減少や企画などの負担感から、サークル継続が難しくなってきている。拠点・区共に活動の意義や目的を再確認し、仲間とともに子育てをしていくことの視点を大切にしていくとともに、地域の支援者とともに活動を支えていくようにしていくことが必要である。	A	A
②養育者に対して地域活動の大切さを伝えるとともに、地域の子育て支援活動に関心のある人が、活動に参加するきっかけを作っている。	・拠点ボランティアや子育てサポートシステム提供会員など多世代にわたる地域の担い手が、広く地域全体で子育て支援に取り組む雰囲気づくりを目指したい。	B	B
③広く市民に対して、子育て家庭を温かく見守る地域全体での雰囲気づくりに取り組んでいる。		A	A
④これから子育て当事者となる市民に対して、子育てについて考え、学び合えるように働きかけている。		A	B

### 評価の理由(法人)

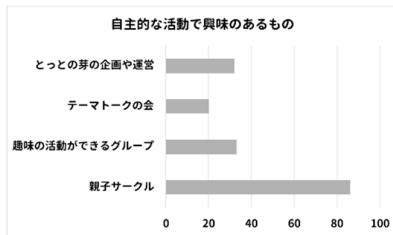
#### (主なデータ)

##### ※1 サポーター登録数

	R4	R5	R6
一般	57	71	82
学生・キッズ	1	1	5

##### ※2 令和6年度とっとの芽利用者アンケート

#### 「自主的な活動への興味」



##### ※3 学生受け入れ人数

学生の受け入れ人数(延べ)		
R4	R5	R6
136人	142人	200人
経済学部、保育・教育学部、看護学部、助産学、工学部等		

#### 1 担い手の活動意欲の向上とスキルアップにつながる取組

- ・区民活動センターや地域ケアプラザで周知していたシニアボランティアポイントをきっかけに、令和6年度は20名の新規サポーター登録につながり、演奏や見守り、おたんじょう会などの活動をしている方々がいる。また定期的に開催しているサポーター主催の交流会は、情報交換や仲間づくりの場になっており、参加者からは「とっとの芽の活動があるから毎日刺激的で楽しい」という声もあつた。(※1)
- ・つどいの広場連絡会では、「これからの子育て支援」をテーマに、運営上の困りごとや工夫などの意見交換を行った。今後も連絡会を通じて、継続的に情報共有と相互協力を図れるよう働きかけていく。
- ・主任児童委員向けの遊びの講座では、その場で簡単に作れる保育教材を制作・練習し、現場で実践できる遊び(エプロンシアター・手遊び)の紹介や、拠点での保育教材の貸出を紹介した。それぞれの支援会場での実践に活かされている。
- ・「発達の気になる子の理解と支援」についての講座を開催した。講師からの基本的な知識や対応方法についての講義と、実際に発達障がいのある中学生より「どんなサポートが助かったか」についての講話と質疑応答を行った。提供会員や子育て支援者など地域で活動する方が20名ほど参加し、障がいの理解につながった、との声があつた。

#### 2 子育て当事者が地域で活動するためのサポート体制

- ・親子サークル交流会は、スポーツセンターとの共催で、大勢で体を動かす遊びを提案し普段の活動に活かせるような企画ができた。サークルメンバーだけではなくサークル活動に興味のある親子との交流も兼ねたことで、新たな加入につなげることができた。
- ・親子サークル交流会のほかに、いつでも使える情報共有の場としてオープンチャットを開設した所、集客や資金調達の方法、運営の相談など活発な意見交換が行われている。引き続きチャットルームでサークルが抱える課題を把握し、活動継続のフォローしていく。
- ・拠点で活動が始まった劇団ぴよぴよは、年々地域のイベントなどから公演依頼が入るようになり活発な活動を行っている。引き続き道具制作のための物品提供や練習会場のサポートを行い、活動のバックアップに努める。
- ・拠点利用者がクリスマス会や座談会などのイベント企画に参画し、また資格や特技を生かした講師として活躍できる機会をつくることができた。引き続き、拠点の企画や運営に興味のある利用者を巻き込みながら、地域活動に参画し、活躍できる場を提供していく。

### 3 子育てに関心を持ってもらうための周知啓発の取組

- ・拠点見学者や地域の方が集まる場（地域福祉保健計画ハートプラン地区計画作成検討の場、区社会福祉協議会主催の福祉フェスタなど）で、子育てに温かい地域づくりの必要性を伝えることができた。
- ・地区別子育て連絡会を通して親子のニーズや子育ての状況を共有している。さらに課題と取り組みを確認していく必要がある。

### 4 小学生から大学生を含む、これから親になる方へ学びの場を提供

- ・学生研修や実習の初日には必ず子育て支援の必要性を説明し、子育てに対するイメージの共有を行った。また子育て当事者の話を聞き子どもと接することで、親が抱えている課題や困難さを知る機会となり、自分の将来像や親への感謝の気持ちに繋がった。（※3）
- ・小学生に向け沐浴体験や妊婦体験、赤ちゃんの抱っこ体験会を実施した。小学生から積極的に質問が聞かれ、赤ちゃんのお世話を通して大変さだけではなく、嬉しさや喜びを感じることができたと感想があった。またその後ボランティア登録をして活動につながっている。
- ・妊娠期プログラムのお世話体験会は、赤ちゃんタイムと同時刻の開催とすることで、実際の赤ちゃんを抱っこしたり、先輩夫婦に気軽に質問したり、アドバイスを受けたりと産後の生活イメージができる学びの場となっている。また学生の実習が重なるときは、お世話体験会に参加を促し交流する場を設けることで、子どもがいる生活についてのイメージが持てるよう工夫している。

### 評価の理由（区）

- ①
  - ・広報区版にて、子育てを応援したい人が拠点に繋がれるよう、拠点ボランティアの活動内容を掲載し、周知した。
  - ・拠点のボランティア養成講座や拠点のボランティア（サポーター）の状況について確認している。
  - ・つどいの広場のスキルアップに向けて、連絡会の開催を通じ、取り組み状況や課題を拠点と共有した。妊娠期からつどいの広場につながるような周知の工夫ができた。
- ②
  - ・親子サークル交流会の企画内容を確認し、担い手のモチベーションや活動継続に繋がる内容となるよう助言を行った。
  - ・ひろば利用者の中から、特技やアイデアを生かした企画を実施していることを確認した。
  - ・拠点の人材育成に関わる講座や取組について引き続き確認していく必要がある。
- ③
  - ・子育て連絡会全体会を通じて、子育ての現状や子育て支援の必要性を啓発した。また、継続して参加者同士で情報共有や意見交換を行ながら、地域全体で子育て家庭を見守る地域づくりに取り組むことができた。
- ④
  - ・広報区版にて、これから子育て当事者となる市民向けに、拠点の周知を行った。

- ・これから子育て当事者となる市民が学びあえるように、産後クライシスや夫婦のコミュニケーション、父親支援など、区での妊娠期支援の実施内容を拠点と共有した。
- ・拠点内の学生実習の受け入れ状況や小学生向けの企画について、定例会で確認を行った。
- ・区で受け入れている看護学生に、拠点見学を組み込み、子育て支援の実態について学んでもらった。
- ・これから子育て当事者となる市民への拠点の取り組みについて、引き続き確認、助言していく必要がある。

## 拠点事業としての成果と課題

### (成果)

- ・親子サークルは、日頃はオープンチャットでつながり、年2回交流会を実施した。サークル同士のつながりが強化され、活動の支えあいにもつながった。
- ・子育て連絡会だけでなく、区社協と連携しての取り組み(地域福祉保健計画作成検討の場や、区社会福祉協議会主催の福祉フェスタなど)の場で、子育てに関する周知啓発を行い、地域全体での子育て支援の機運の醸成に向けて取り組んだ。
- ・これから子育て当事者になる区民が、拠点での実習や研修を経て、子育ての大変さだけでなく、楽しさややりがいを実感し、子育てに対する前向きなイメージを獲得できた。また、ボランティア登録にもつながった。

### (課題)

- ・既存のサークルが活動継続できるような支援や、サークル活動に興味がある方が新たに活動につながる支援を継続的に行っていく。また、居場所事業の連続講座などで知り合った方が、講座終了後も継続して仲間や地域とつながれるような支援を行う必要がある。
- ・地域全体で子どもが育ちやすい風土づくりのために、現在子育て支援に関わっている方以外にも、今の子育て支援について知ってもらう。また、子育て当事者にも、今の地域の仕組みや役割についての啓発を検討していく。

## 振り返りの視点

- ア 地域で子育て支援に関わる人が増えているか。かつ新たな担い手を発掘・養成する取組がなされているか。
- イ 子育て家庭や担い手のニーズを踏まえ、活動意欲の向上やスキルアップにつながる取組がなされているか。
- ウ 地域の子育て支援活動がより充実されるよう、必要に応じて新たな活動希望者を結び付けているか。
- エ 養育者が地域を身近に感じ、地域の活動に関心を持てるように働きかけているか。
- オ 活動希望を丁寧に受け止め、拠点内の活動や身近な子育て支援活動等に結び付けているか。
- カ 子育ての現状や子育て支援の必要性を周知・啓発しているか。
- キ 子育て家庭(妊娠期の方を含む)を温かく見る気持ちを持つことができるよう働きかけているか。
- ク これから子育て当事者となる市民と子育て中の親子がふれあい、学び合う機会や場を作っているか。

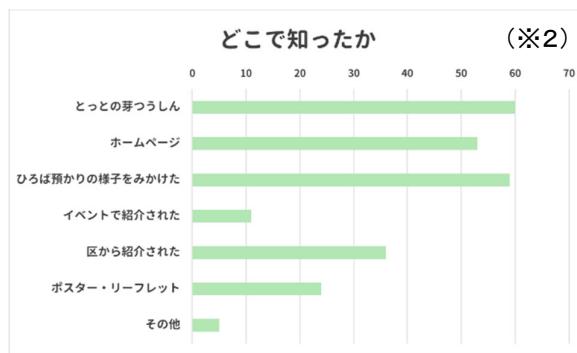
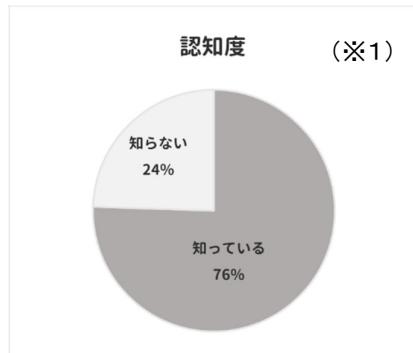
## 6 横浜子育てサポートシステム区支部事務局運営事業

目指す拠点の姿	(参考)3期目振り返りの課題	自己評価(A~D)	
		法人	区
①子育てサポートシステムに、多くの区民の参画が得られている。	・提供会員数が地区により偏りがあるため、会員を増やしたい地域を重点に周知活動を行っていく。また区と協力し新たな層(小・中学生保護者)への周知も視野に入れていく。	B	B
②養育者にとって、必要な時に利用しやすい事業となっている。	・個人情報取り扱いについては、定期的に注意喚起を行っていく。また職員間でも取り扱いには厳重注意し、確認作業を徹底して行う。	A	A
③会員が地域の支え合いの良さ、大切さを理解しながら、利用や活動を継続できるように、支えることが出来ている。	・拠点のネットワークを生かし、拠点ボランティアや子育てサポートシステム提供会員など多世代にわたる地域の担い手を通じて、広く地域全体で子育て支援に取り組めるよう目指したい。(人材育成・活動支援事業 再掲)	A	B
④養育者の利用相談内容に応じて、子育て相談や他機関等の情報を提供し、必要な支援につなげている。		A	B

### 評価の理由(法人)

(主なデータ)

令和6年度 とっとの芽利用者アンケートより 回答者数:200名



・会員数

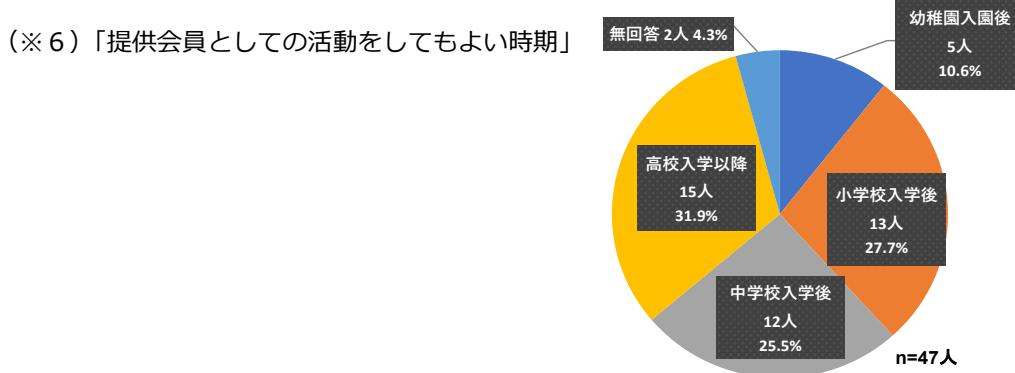
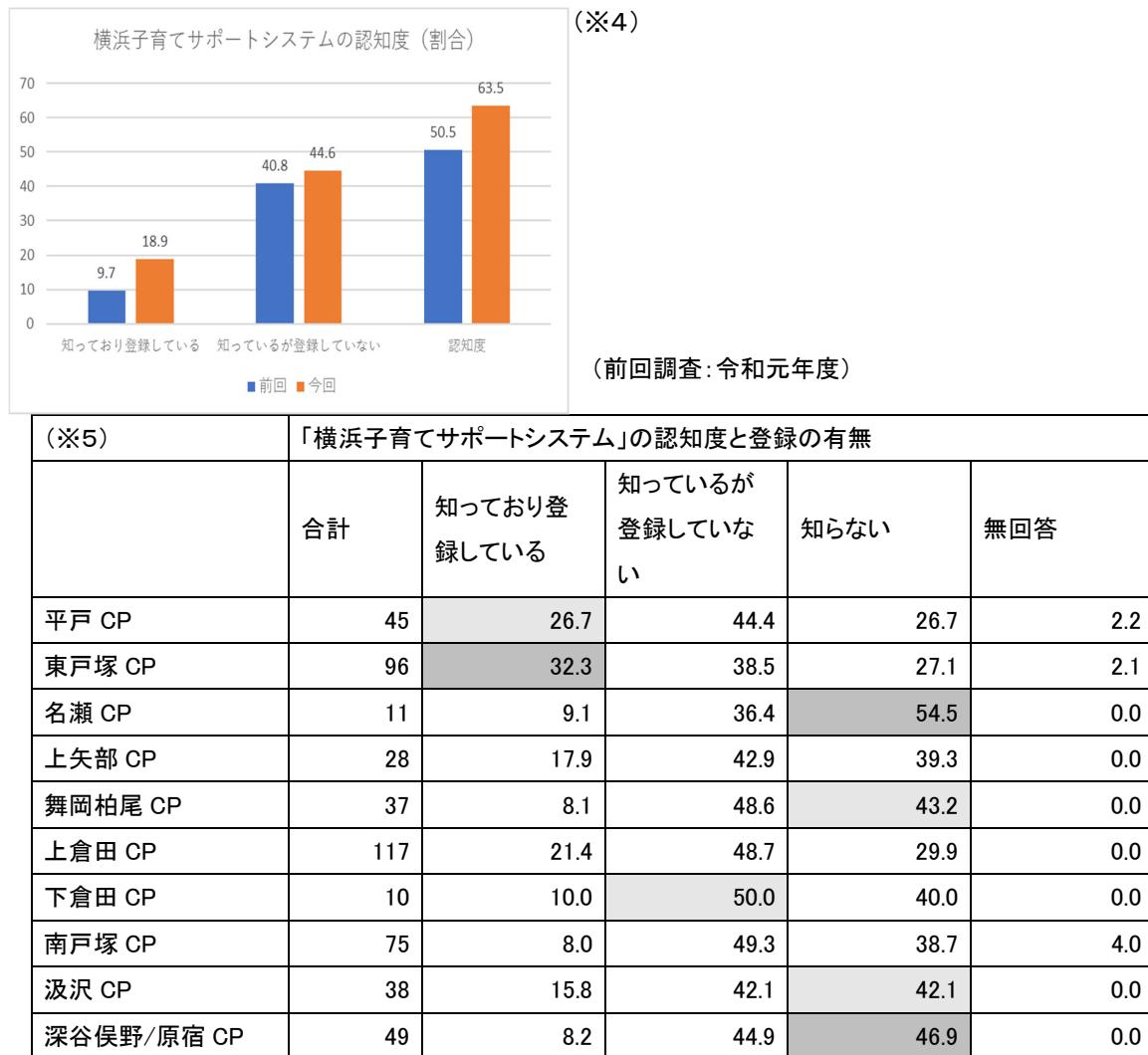
	R4年度	R5年度	R6年度
利用会員	1,030	1,123	1,139
提供会員	171	179	185
両方会員	41	40	42
合計	1,242	1,342	1,366

・活動実績

	R4年度	R5年度	R6年度
コーディネート数	261	385	473
事前打ち合わせ 同席数	195	285	328
ひろば預かり件数	212	393	641

令和6年度 戸塚区地域子育て支援拠点「とっとの芽」に関するアンケート

「横浜子育てサポートシステム」の認知度と登録の有無 ケアプラザ区分



## 1 様々な媒体の活用と地域連携を利用した周知活動

- ・広報区版の掲載や、とつか区民活動センターのボランティア掲示、地域のイベント(商業施設・戸塚スポーツセンターなど)へ参加し、提供会員募集のポスター掲示やチラシで周知したことで、提供会員の獲得につながった。
- ・会員向け通信での両方会員の周知や、入会説明会でeラーニングの研修受講ができることなどを話したことで、両方会員に興味を持ち研修受講につながった。また、現在活動している提供会員からの紹介で研修受講につながる方もいた。
- ・戸塚駅周辺の提供会員が不足していることが課題。引き続き関係機関と拠点内で連携し重点的に周知活動を行う。

## 2 養育者に対して利用促進のための取組み

- ・サテライトでの認知度を上げるために、「子サポの日」(注1)を設け、サテライトひろば利用者に対して横浜子育てサポートシステムの周知と利用促進をしたことで、認知度やひろば預かりの依頼が増えた。(※1)
- ・サテライトでのひろば預かりが可能な提供会員が増えたことで、利用者の預けやすさに繋がった。
- ・拠点スタッフ内の連携により、ひろば利用者が横浜子育てサポートシステムにつながる仕組みができている。拠点スタッフとの連携でひろば預かりを希望する方が増え、預かりの様子を見ること、預かりのイメージが持てたことで、ひろば預かりの依頼が増えている。(※2、3)
- ・入会説明会は必要に応じて個別の訪問やオンラインで行い、急な依頼にも対応し利用につながった。また、コロナ禍ではオンラインの説明会を定期開催するなど外出せずに会員登録できるように養育者のニーズに答えた。

注 1)子サポの日：サテライトに1日横浜子育てサポートシステムのスタッフが常駐する日

## 3 会員の活動が継続できるようにコーディネート

- ・会員相互の援助活動であることを入会説明や事前打ち合わせ時、会員向け通信などで伝え、地域活動の相互理解に努めた。会員のニーズに寄り添いながらコーディネートをし、事前打ち合わせにつながっている。
- ・会員に対して活動後も必要に応じて話を聞き、心配事を解消するよう調整した。提供・両方会員からの相談(不安や疑問、やりがいなど)も丁寧に聞き取り、活動の継続と会員登録の更新につながっている。
- ・新規事業や地域子育て支援拠点サイトへの移行時には、会員の不安感のため、説明会や個別での対応を行い、提供会員の活動の継続につなげた。
- ・会員交流会では、会員同士の情報交換ができ、支え合いの良さを確認できた。
- ・会員交流会でのヒヤリハットの共有と、事前打ち合わせや会員向け通信を介して個人情報の取り扱いの注意喚起をしたこと、事故無く安心、安全な活動が行われている。新システム稼働により、さらに注意をはらい事務作業にあたっている。

## 4 必要な支援へつなぐための拠点内や他機関との連携

- ・養育者の利用相談や依頼内容に応じて、区や拠点内で連携し対応した。
- ・支援が必要な親子、関係機関と連携が必要な親子などの依頼については、内容を丁寧に聞き取り柔軟に対応し、必要に応じて横浜子育てパートナーにつなげた。
- ・行政からの紹介や、他機関から紹介された方で、他のつなぎ先の受け皿がなく横浜子育てサポートシステムで調整していることが増えている。
- ・必要な情報が養育者へ届くように、他機関の紹介(つどいの広場、一時預かり、産前産後ヘルパーなど)や地域情報を提供し、実際の利用につながった。

### 評価の理由(区)

①②横浜子育てサポートシステムの事業について、様々な機会をとらえて周知し、認知度、登録率ともに大幅に上昇している(※4)。エリアごとでは、差が生じている(※5)。提供会員の獲得に向けては、積極的に拠点が周知を進めているものの、利用者のニーズは増加の一途を辿っており、区全域で提供会員の受け皿が不足していること、エリアごとの充足度に差が生じている状況は課題である。担い手となる意欲のある区民の発掘や、提供会員の活動が可能な時期(※6 高校入学以降)を迎えた養育者をターゲットにさらなる周知が必要である。

②区民に横浜子育てサポートシステムの趣旨や内容が正しく周知され、必要な人に情報が届くように課内の保育教育コンシェルジュや社会福祉職など、保健師以外の職種にも積極的に事業周知をはかっている。

②個別ケースにおいて、子育てサポートシステムへの丁寧なつなぎが必要な場合は、事務局と事前調整・情報共有できている。

③発行物が会員に伝わりやすいものとなるよう、都度、確認と助言を行った。会員交流会については、提供会員が日頃の活動を振り返り、悩みや困りごとを共有できるよう確認が必要である。

④事務局からも、気になる世帯の報告や対応の相談があり、タイムリーに地区担当保健師と連携した対応が行えた。

### 拠点事業としての成果と課題

#### (成果)

- ・周知活動により、横浜子育てサポートシステムの認知度が向上したことや、クーポンの配布により、コーディネート件数が増加した。
- ・ひろば預かりにより、他の拠点利用者に預かりのイメージが持てたことで、利用促進につながった。
- ・提供会員の減少を防ぐために、丁寧なフォローを行ったことで、活動の継続や増加につながっている。

#### (課題)

- ・利用会員と提供会員の時間のミスマッチにより、朝晩の送迎等のニーズに対応できる提供会員が不足している現状があるが、できる限りの対応に努める。
- ・支援が必要なエリアの提供会員の増加を目指し、周知対象やエリアの検討、関係機関との調整が必要である。
- ・横浜子育てサポートシステムが民間の預かりサービスと変わらないと思われてしまう一面がある。事業の継続に向け、市域の動きや新たな制度との連携に努めていく。

### 振り返りの視点

ア 区民に対して、子育てサポートシステムについての周知活動を行っているか。

イ 提供会員数拡大に向けた取組がなされているか。

ウ 就労に関する以外の養育者のリフレッシュ等の理由での利用を含め、利用したい人が利用に結びつくための工夫をしているか。

エ 会員が相互の合意のもとに安心安全な活動できるよう、丁寧なコーディネートができているか。

オ 会員の声の把握に努め、必要に応じて活動内容の調整や追加のフォロー等を行っているか。

カ 活動における事故防止のための講習、個人情報取扱いに関する注意喚起など、会員への安全対策をはかっているか。

キ 提供・両方会員が安心・安全な活動を継続して行えるよう研修会等の取組がなされているか。

ク 会員が活動の意義を感じられ、会員間の親睦を深め信頼関係の構築のため、会員間の交流をはかる取組がなされているか。

ケ 援助活動の調整時や会員の声から把握した子育てのニーズを地域子育て支援拠点としての事業に活かしているか(新たな事業の実施や事業の見直しなど)

コ 利用相談の内容に応じて、子育てサポートシステム以外のサービス等の情報提供や関係機関に適切につないでいるか。

サ 専門対応が必要と考えられる相談については、専門機関に適切につないでいるか。

## 7 利用者支援事業

目指す拠点の姿	(参考)1期目振り返りの課題	自己評価(A~D)	
		法人	区
①拠点における利用者支援事業が、区民や関係機関に広く認知されている。	・妊産婦の実情やニーズを区と拠点が共有し、横浜市版子育て世代包括支援センターとして切れ目ない支援を更に充実させていく。特に妊娠期～産後の時期に丁寧に寄り添い、養育者自身が安心感を持って子育てに取り組めるように支援していく。	A	A
②相談者に寄り添い主体性を尊重しながら、個別相談に応じ、適切な支援を行っている。	・今後、相談の振り返りや検討、地域で得た親子の情報の中から、ひとり親支援や障がいなど多様な養育者に向けて区と協議しながら課題を抽出し、不足した資源をネットワークを活用し充実させていく。	A	B
③子育て家庭を支えるためのネットワークの一員として、包括的な視点を持って子ども・子育て支援に関する関係機関や地域の社会資源との協働の関係づくりを行っている。	・R2年3月より横浜子育てパートナーが2人体制になったことで、東戸塚エリアと戸塚エリアに分担した。より丁寧なニーズ調査を行い支援に繋がる新たなネットワーク(出張相談含め)の構築を行っていき、更に関係機関への周知をすすめていく。	B	B

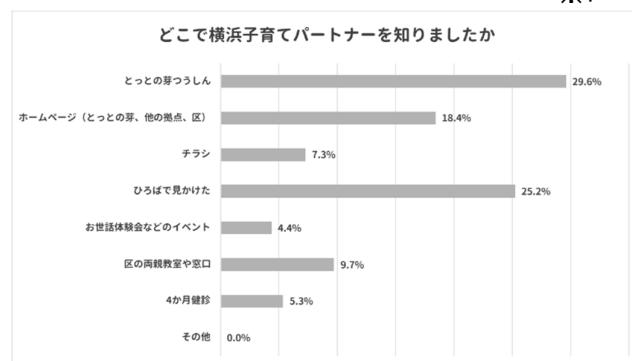
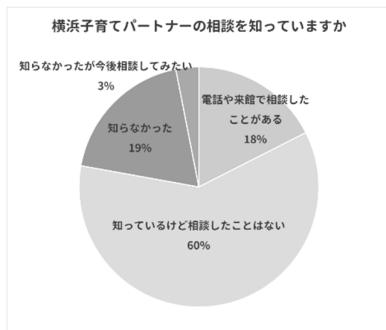
### 評価の理由(法人)

(主なデータ)

令和6年度 とっとの芽利用者アンケートより

回答者数:200名アンケート(区、拠点)

※1



参加した地域会議等

※3

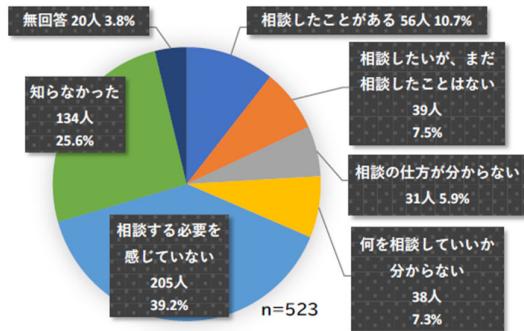
テーマ	内容
R4	母親教室、子育てサポート連絡会、医療機関連携会議、地域支援会場訪問(3会場)、子育て支援者定例会(12回)、ポンテの会、放課後デイサービス見学(2件)
R5	両親教室、4か月健診、子育てサポート連絡会、産科医療機関連携会議、地区別子育て連絡会、地域支援会場訪問(24会場)、子育て支援者定例会(12回)、ポンテの会、放課後デイサービス見学(3件)つくしんぼの会、でこぼこの会、障がい者支援フォーラム、つながるフェスタ、こよりどうカフェ、イオンスタイルとつか、横浜医療センター、療育センター、ひよこ会、主任児童委員定例会、こんにちは赤ちゃん訪問員定例会、保育園、幼稚園
R6	両親教室、4か月健診、子育てサポート連絡会、産科医療機関連携会議、地区別子育て連絡会、地域支援会場訪問(24会場)、子育て支援者定例会(12回)、つどいの広場連絡会、ポンテの会、放課後デイサービス見学(3件)つくしんぼの会、でこぼこの会、障がい者支援フォーラム、つながるフェスタ、こよりどうカフェ、イオンスタイルとつか、横浜医療センター、療育センター、子ども家庭支援センター、男女共同参画センター横浜、こんにちは赤ちゃん訪問員定例会、保育園、幼稚園

※2

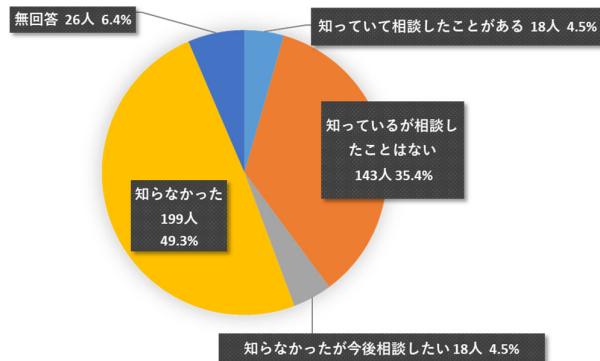
相談件数	R4年度	R5年度	R6年度
東戸塚(ひろば)	251	359	538
東戸塚(電話)	55	45	48
サテライト(ひろば)	238	318	548
サテライト(電話)	39	23	29
オンライン・その他	7	43	17
出張相談	93	151	129
合計	683	939	1,309

※主な出張相談先(とことこ、つどいの広場、こよりどうカフェ、地域の子育て支援会場等)

横浜子育てパートナーに相談したことはありますか。



参考) 前回(令和元年度)調査結果(選択肢が異なる)



横浜子育てパートナーの認知度

令和6年度:「相談したことがある」「相談したいが、まだ相談したことない」「相談の仕方が分からない」「何を相談していいか分からない」「相談する必要を感じていない」までを「認知している」、「知らなかった」を「認知していない」として算出

令和元年度:「知つていて相談したことがある」「知っているが相談したことない」を「認知している」、「知らなかったが今後相談したい」「知らなかった」を「認知していない」として算出

## 1 妊娠期及び子育て家庭・支援者に向けての周知活動

- ・区開催の両親教室や4ヶ月健診などに横浜子育てパートナーが訪問し直接話をしたことで、早期からの相談先として認知された。(※1)
- ・関係機関への周知として、主任児童委員、こんにちは赤ちゃん訪問員定例会で事例を交えながら横浜子育てパートナーの役割を伝えたところ、地域の担い手経由で相談につながった。
- ・周知方法の一つとして、「横浜子育てパートナーの日」(注1)を設け、ひろば内で掲示、巡回し、相談対応したことで、多くの利用者に認知され相談が増えた。(※1、2)
- ・妊娠期から切れ目のない支援を意識して、拠点でのお世話体験会に参加した一組一組に直接声をかけることで産前からの電話相談につながった。
- ・拠点につながっていない人にも横浜子育てパートナーを周知するために、SNSや広報を活用し、より効果的な発信方法を検討していく。
- ・地域などでの出張相談を継続し、拠点から離れた場所でも気軽に相談できるように努めた。出張相談日を目指して来館する方も見られている。
- ・保育園や幼稚園の協力を得ながら、就園後も相談できることを養育者へ周知していく。

注1)横浜子育てパートナーの日:利用者が気軽に相談ができるように、子育てパートナーが拠点のひろば内で巡回する日

## 2 相談者の自己決定を促す関わり

- ・担当スタッフと連携して最新の地域情報を収集し、更新を随時行ったことで、養育者に必要な情報をタイムリーに案内することができた。
- ・様々な研修を受講し、相談対応に必要なスキルや知識を得て、相談者の背景理解を深めた。関係機関の役割やつなぐ際の対応方法についても学び、相談対応に活かしている。(利用者支援従事者研修、外国籍支援、里親懇談会、不登校・引きこもり等)

- ・ひろばスタッフや専門相談員、地域支援者からの相談で、継続した支援が必要な場合は、本人同意を得た上で情報共有し、役割分担の確認をしながら多角的なフォローを行っている。

### 3 関係機関や地域との協働の関係づくり（※3）

- ・各地区別子育て連絡会で関係機関と顔の見える関係づくりに努め、親子の課題や背景について共有し、連携して支援を行うことができた。
- ・ひとり親家庭のイベント参加者の声から、ゆっくり話ができる場が必要を感じ、閉館後のひろばを利用し、親子で参加できる場としてシングルさんのおしゃべりサロンを始めた。また近隣の保育福祉専門学校、フードバンクの協力を得ながら開催を継続することで、徐々に参加者が増え、身近な相談先として認知されつつある。
- ・里親養育懇談会では、児童相談所や里親との交流を通して、拠点の周知を行い、その後の利用につなげることができた。また社会的養護の家庭について理解を深め、配慮事項や必要な子育て情報を知ることで、その後の相談対応に活かすことができた。
- ・戸塚区分娩取扱医療機関・戸塚区福祉保健センター連絡会に参加し、妊娠期から産後の支援の連携の必要性を確認した。参加した医療機関とつながることができ、その後、拠点の事業への協力が得られた。
- ・区との定例会で母子保健コーディネーターと情報共有を行い、区の保健師や助産師とも妊娠期事業の企画や振り返りを行うことで、お互いの抱える課題を共有し、それぞれの事業に活かしている。

#### 評価の理由（区）

①

- ・両親教室、4ヶ月児健診にて横浜子育てパートナーを紹介する機会をつくり、すべてのエリアの妊婦への周知に協力している。乳幼児健診にて必要な方には横浜子育てパートナー紹介カードを配付するなど、利用へつながるよう周知した。
- ・広報区版の特集にて横浜子育てパートナーを周知した。
- ・横浜子育てパートナーの認知度は、令和元年度約4割だったのに対し、令和6年度は約7割と増加した。（※4）
- ・利用者支援事業の機能がない既存の居場所などへ、効果的な周知や相談ができるよう一緒に考えていくことが必要。

②

- ・事例の共有、振り返りの中で、適切に関係機関につないでいることや支援の方向性について確認できた。地区担当保健師に相談が入り、迅速な対応につながっている。
- ・個別相談から、必要な人を区の事業へもつないでもらえるよう、区の事業を横浜子育てパートナーへ共有している。
- ・専門的な対応をする相談について、その後の支援につながるように、紹介、仲介ができているか、引き続き確認していく必要がある。

③

- ・地区別子育て連絡会や子育て支援者定例会への参加を通じて、関係機関との連携ができる体制となっている。
- ・ネットワークを活かして企画した出張相談やシングルサロンについて確認した。
- ・妊娠期からの支援については、母子保健コーディネーターと分娩取扱医療機関との連携を継続していくよう、引き続き調整していくことが必要。

#### 拠点事業としての成果と課題

（成果）

- ・横浜子育てパートナーの周知については、広報区版やSNSなどで発信するだけでなく、対面による顔が見える関係づくりを大切にして取り組みを継続してきた。認知度が大幅に増加し、継続相談にもつながった。
- ・研修受講を活かし、対応方法の工夫が必要な方に対しても、背景を理解し継続した相談対応を行えている。また、継続支援が必要な場合には、関係機関とも情報共有しながら、見守ることができている。
- ・地区別子育て連絡会や、様々な団体の会議を通じて、子ども・子育て支援に関する関係機関や地域の社会資源との関係づくり・関係強化を行っている。

(課題)

- ・地域で得た親子の情報の中から、課題を捉え、関係機関等と共有し、拠点事業の充実や、新たな地域資源の把握に努める。
- ・就園後も身近な相談窓口として認知されるよう努めていく。

**振り返りの視点**

ア 利用者支援事業を幅広く区民や関係機関に周知しているか。

イ 養育者に対して、気軽に相談しやすい仕組みづくりや工夫をしているか。

ウ 最新の情報を収集し、活用できるよう工夫しているか。

エ 相談に対しては、傾聴に努め、ニーズを把握して対応しているか。

オ 拠点内でパートナーの役割を理解し、日頃から相談者を拠点内でつなぎ合うことについて、お互いの役割分担を明確にしたうえで、相談対応・利用支援を行っているか。相談者の相談内容に応じて継続対応やつなぐ必要性を判断し、対応しているか。

カ 専門的な対応を要する相談に対して、相談内容と相談者のニーズを踏まえ、速やかに関係機関への紹介・仲介・支援依頼を行うなど、適切な対応をとっているか。

キ 拠点内連携、関係機関への紹介・仲介後も必要に応じて役割分担を確認しながら、フォローをしているか。

ク 相談の対応状況や支援の適切さ、拠点内外での連携状況等について、多角的な視点で振り返りや検討を行っているか。

ケ 利用者支援事業の周知や個別相談等の取組を通じて、支援につながる新たなネットワークの構築を行っているか。

コ 拠点のネットワークを活用し、関係機関や地域の社会資源との関係づくり・関係強化を行っているか。

サ 把握した課題を関係機関等と共有し、拠点事業の充実、必要な支援の調整や見直し、不足する資源の調整、提案や新たな創出につなげているか。